

拉致問題と「感情の鍊金術」

— 小泉劇場における横田・ブッシュ会見劇を眺めながら —

鄭敬謨

偶然か、それとも必然か？

去る四月二十八日は、記憶に値する特別な日であったようだ。爱国主義を鼓吹するための「教育基本法改訂案」が国会に上程されたかと思うと、戦前の治安維持法の再来であろうか、「共謀罪」を含む新しい法律（組織犯罪処罰法）が同時に上程された。そればかりではない。この日を期して、「北朝鮮人権法」が議員立法の形で上程されている。しかもこれと符節を合わせるが如く、四月十八日、東京を出港した海上保安庁の調査船二隻を島根沖の海上に遊弋させ、いつでも紛争の島独島（竹島）の海域に突入せんばかりの態勢を取らせる事により隣国との緊張がピークに達している。さなか、日本政府は拉致被害者横田めぐみさんの母親早紀江さんをワシントンに派遣、ブッシュとの会見を実現させると、いうスタンプ（離業）を演じさせた（日本時間四月二十九日未明）。以上一連の出来事は、決して偶然の一致ではない。緻密な計画に基いて巧みに演出された小泉政権の演劇であつた。

これに関連して記憶に甦つてくるの

は、公職追放令の廃止（一九五二年）と共にいち早く政界に復帰し、瞬く間に政権の座に就いたかつてのA級戦犯岸信介のことである。そして彼が三期總理を務めている間（五七～六〇年）渾身の力をこめて達成しようとした政治目標が、①平和憲法の撤廃、②再軍備の達成、③治安維持法の復活の三点に要約されるものであったということだ。

しかし六〇年安保闘争の騒乱の中、涙を呑んで岸が政権の座を降りて以来、何れの内閣においても岸の目指した終生の目標は達成されなかつた。岸の志に最も忠実たらんとした政治家は恐らく中曾根だつただろうと思ふが、剛腕で知られたその中曾根の力をもつてしても、それは可能ではなかつたのである。

私の古いノートによると、通産大臣時代の中曾根は一九七三年四月一日、東京の外人記者クラブで演説したさい二つのことを主張した。その一つは、日本の海上自衛隊の哨戒距離を一〇〇〇キロに伸ばしたいということであり、二つ目はその時点から五年後、つまり一九七七年には、第九条の撤廃を含めて現行の平和憲法を改訂するための国民投票を実施した

い、ということであつた。因みに中曾根のこの発言は外人記者クラブで行なわれたせいか、私が目にしている日本の新聞にはどこにも報道されておらず、英字紙『ジャパン・タイムズ』で見つけてノートに書きとめておいたものである。

このように、岸信介が権力の座に就いて以来半世紀にわたり歴代の内閣が注いできた執拗な努力にも拘らず、岸の悲願であり、同時に日本の保守勢力が目指してきた三つの政治目標は常に高嶺の花のままであつた。

ところがこのような閉塞状態は、いま劇的に変つたと言つてよい。つまり岸以来の三つのターゲットは、小泉「劇場」内閣の演出により、少くとも次の内閣になれば容易に手の届く至近距離にまでたぐり寄せられている。しかも小泉総理が意中の後継者として後押ししている人物が安倍晋三であつて、岸信介の孫ときてみれば、これを単なる偶然だと見逃してよいのか、判断に迷わざるを得ない。

小泉「劇場」における拉致事件の意義

「感情の鍊金術」という言葉があつて、これは『靖国問題』（ちくま新書）の中で著者の高橋哲哉氏が披露した彼の造語であるが、戦場で斃れた死者を悼む悲嘆の気持ちを、歓喜の念に転換させる点に

「付記」この稿を書き終えた後、五月十四日の『ジャパン・タイムズ』紙に次のような投書が掲載された。以下、私の翻訳で紹介させて頂くことにした。

(チヨン・キヨンモ、シアレビム社代表)

ピヨンヤン側のハートに迫る道

四月下旬、めぐみの母親早紀江の訴えに接したワシントンは激情につき動かされた。彼女は米議会人権委の前で、拉致された娘のことについて証言し、ブッシュ大統領とも会談した。北朝鮮の拉致問題がこれほど全世界的規模で取り上げられたのは初めてのことであり、米国の議員や一般国民に大きな衝撃を与えた。

軍隊は、中国、フィリピン、朝鮮その他の国から十数万の若い女性を拉致して性奴隸として虐待し、役に立たなくなるとモノのよう捨てたのである。近年になつて日本により拉致されたこれら若い女性たち——今は年をとり老婆となつているが——は、次々と日本に現われ、政府、司法当局、言論機関、そして一般世論に声を大にして訴えた。しかし彼女たちが受けたのは、度重なるはずかしめと屈辱であった。

横田夫人に尋ねたいが、日本が犯した拉致と、朝鮮が犯した拉致の間には、ど

うしてこれほどの違いがあるのだろうか。

北朝鮮に拉致された被害者たちは、少なくとも人並みの生活を送り、結婚し

て子どもを産み、家庭を持つことが許され、人権については日本よりましな配慮を与えられたのではないのか。

日本は横田夫人をワシントンに送り込み、新聞やテレビを総動員してPR活動をさせるだけの力を持っていたが、同様に誰かの娘でありながら日本人によって拉致され集団的暴行にさらされた上、最

少限度の正当な補償さえ拒まれた数千、数万の乙女たちに、果してどれだけの配慮を示したのか？

この点に関する日本の公式姿勢は利己的一語に尽き、正当化し難い。もし横田夫人が、自分が経験した悲しみは他の数多くの母親が感じたと同じ悲しみであつたと訴えたなら、歴史は変り得たかも知れない。北朝鮮の当局者も、少しは胸を打れたのではないだろうか。

(東京、M・S・N A S I R)

■映画紹介■ 『六ヶ所村ラプソディ』を作つて

鎌仲 ひとみ



上映会の問い合わせ
グループ現代 03-3341-2863

二〇〇四年から二年間、六ヶ所村に通つて撮つていた作品が、この三月に完成しました。前作『ヒバクシャ——世界の終わりに』では、劣化ウラン弾の影響を受けたイラクの子どもたちや、アメリ

カの世界最初の再処理工場ハンフォードの風下で放射能汚染を受けた住民を取材しましたが、今回、六ヶ所はまさに日本のハンフォードだと感じ、撮り始めたのです。どちらもプルトニウム製造工場だという点で共通していますし、風下に農地が広がつている点も同じです。ハンフォードのシーンでは、二人の兄弟が登場します。兄のトムは、核施設からの放射能汚染によつて多くの風下住民が病んで死んでいったこと、今もそれが続いていることの責任を政府に問います。ところが政府は、大量の放射性物質を放出したことを受けたトムを批判します。騒ぎ立てたら自分たちの作物が売れなくなる、特に大のお得意さま、日本が買つてくれな

おいて、靖国神社は正に「感情の鍊金術」を可能ならしめた国家の有用な施設だというが、高橋氏の指摘である。これを念頭において考えるとき、拉致問題という装置を通して小泉「劇場」が巧みに演じて見せたのが「感情の鍊金術」であつたというのが私の判断である。今まででは加害者として糾弾されがちであったのが、日本人の立場であった。それが拉致問題を契機として日本人全体が横田めぐみさんの親御さんと心理的な一致をとげ、逆に自分たちこそが被害者であつたという新たな立場を獲得したのである。日本自身が犯したかつての国家犯罪を一切不問に付した上でのこのような立場の逆転は、日本人の鬱屈した心理状態に快感にも似たカタルシスを与えた点においてまさしく「感情の鍊金術」であつたのだ。そしてこの巧みな「鍊金術」を可能ならしめたのが、北朝鮮があたかも悪魔の巣窟であるかのような激烈なヘイトキャンペインである。しかもこのヘイトキャンペインの先頭で旗を振つたのが岸信介の孫安倍晋三であつたのは、誠に象徴的だと言わざるを得ない。

横田夫人のワシントン訪問が 物語るもの

東条を含む七人のA級戦犯が処刑されたのは一九四八年十月二十三日である

が、同じくA級戦犯であつた岸信介が無罪放免で巣鳴拘置所から釈放されたのはその翌日、つまりその年のクリスマス。イーブの日であつた。獄門を出た岸が、当時吉田内閣の官房長官を務めていた佐藤栄作の官邸に直行し、夕食として予め所望しておいたマグロのトロで舌鼓を打つたというのは、ずいぶんと人口に膾炙されたエピソードであるが、実を言えば岸は獄中にいたときから、OSS (CIAの前身) を通じてワシントン当局からの接触を受けており、釈放された後自分が首相に擁立されるだろうということ、首相になつた後果すべき任務が何であるかということを予め知つていたのである。最近とみに慌しい動きを見せている日米間の軍事的統合化は、半世紀前のある頃すでに岸に課せられていた三項目の任務の達成が最終段階に至つたことを示すものであるが、岸が生前果たすべくして果しえなかつた任務が、近頃になつて（小泉の手で）達成の域に接近し得た裏に、横田めぐみさんの拉致事件が大きな役割を演じたことは、前述の通りである。

めぐみさんの母親横田夫人を公式的にワシントンに迎えたのは、国防部次官のリチャード・ローレスであつて、このことは米政府当局が拉致事件そのものを軍事問題の一環として捉えていることの何よりの証拠ではないのか。日本政府のお

が、同じくA級戦犯であつた岸信介が無罪放免で巣鳴拘置所から釈放されたのはその翌日、つまりその年のクリスマス。イーブの日であつた。獄門を出た岸が、当時吉田内閣の官房長官を務めていた佐藤栄作の官邸に直行し、夕食として予め所望しておいたマグロのトロで舌鼓を打つたというのは、ずいぶんと人口に膾炙されたエピソードであるが、実を言えば岸は獄中にいたときから、OSS (CIAの前身) を通じてワシントン当局からの接触を受けており、釈放された後自分が首相に擁立されるだろうということ、首相になつた後果すべき任務が何であるかということを予め知つていたのである。最近とみに慌しい動きを見せている日米間の軍事的統合化は、半世紀前のある頃すでに岸に課せられていた三項目の任務の達成が最終段階に至つたことを示すものであるが、岸が生前果たすべくして果しえなかつた任務が、近頃になつて（小泉の手で）達成の域に接近し得た裏に、横田めぐみさんの拉致事件が大きな役割を演じたことは、前述の通りである。

めぐみさんの母親横田夫人を公式的にワシントンに迎えたのは、国防部次官のリチャード・ローレスであつて、このことは米政府当局が拉致事件そのものを軍事問題の一環として捉えていることの何よりの証拠ではないのか。日本政府のお

が、同じくA級戦犯であつた岸信介が無罪放免で巣鳴拘置所から釈放されたのはその翌日、つまりその年のクリスマス。イーブの日であつた。これは取りも直さず先制攻撃による軍事行動の要求に外ならない。日本政府もまた、軍事的利用価値の側面から横田めぐみさん拉致事件を捉えてきたという誹りを免れないだろう。

ブッシュに会つた時の印象を横田夫人は「善と惡をきちんと弁えている人」といつたようだが、これを聞きながら私は、アメリカの特別な計らいで無罪放免の恩典に浴した岸信介の心境がどんなものであつたか、推量せざるを得なかつた。彼からすればアメリカは絶対的な善であつただろう。そしてアメリカが敵と見なす国は自動的に惡であつたはずだ。以来日本は、岸流のDNAを引き継ぎ、善惡の判断をアメリカに一任する国としてあり続けてきたのではあるまいか。

九条を守らんとする日本の平和勢力は、この点を憂慮してきたのだと思う。アメリカが勝手に起こした戦争に日本が巻き込まれるのではあるまいか、と。だが、拉致騒動以後の情勢は逆ではないのか。日本が先に手出しをしてアメリカを巻き込むシナリオのことだ。真に憂うべきは北朝鮮か、日本か？